

自閉スペクトラム青年の余暇支援アプリケーションを 活用したコミュニケーション支援の実践研究

明 翫 光 宜
曾 我 部 哲 也
小 倉 正 義
辻 井 正 次

要約

本研究では発達障害者の生活支援のためのアプリケーションのうち余暇支援機能を用いて、自閉スペクトラム症青年のコミュニケーションスキル支援プログラムの介入研究を行った。研究参加者は15名が参加し、そのうち事前評定と事後評定の両方の結果が得られた14名(男性13名, 女性1名: 平均年齢は17.64歳, SD = 3.84)をデータの分析対象とした。プログラムの介入効果について居場所感尺度およびコミュニケーションスキル尺度について事前評定と事後評定との比較を行った。その結果、居場所感尺度では有意差はみられなかったが、コミュニケーションスキルは1%水準で有意な向上が示された。

余暇支援アプリを活用した介入の有用性として、(1) お互いに興味のある場所を仲間ともに出かけ、珍しいものや綺麗だと感じた景色を共有し、メンバーでともに楽しむことといった興味関心の共有を行う状況が設定しやすいこと。(2) メンバー同士の話し合いも場所やテーマについて幅広く設定できることから心的飽和の予防を行いながらコミュニケーション・スキルについて練習できること、が考えられた。

【キーワード】：自閉スペクトラム症, 余暇支援アプリ, コミュニケーションスキル

Abstract

In the current study, we examined a social skills training intervention for adolescents with autism spectrum disorder using a leisure support application. We examined pre- and post-assessment data from 14 of 15 participants (13 males, 1 female; average age: 17.64 years, standard deviation = 3.84). To test the effects of the social skills training program intervention, scores on the sense of ibasho scale and communication skills were compared between pre- and post-assessment. The results revealed no significant differences in scores on the sense of ibasho scale, whereas a significant improvement was found in communication skills at the 1% level. The current findings supported the usefulness of the leisure support application. Using this method, it is easy to set up a situation in which people share their interests, such as going to places of mutual interest. This enables people to practice communication skills while preventing psychological saturation by involving a wide range of places and themes for discussion between participants.

【Key words】：Autism spectrum disorders, leisure support applications, communication skills

問題と目的

自閉スペクトラム症（以下、ASDとする）青年の適応に、対人関係の問題がある。対人関係の問題は、いわゆる対人トラブルだけではなく、友人関係の構築とその維持の問題もある。ASDの仲間・友人関係に関するレビュー（日戸・藤野，2017）から、ASD者で相互性のある友人がいると確認されたのはわずか20%で、友人関係の持ち方が定型発達と比較して質的に異なること、青年期には孤立による自己評価の低下、不安や抑う

つのリスクが高まることなどがわかっている。成人期以降の発達障害者の精神疾患の併存は、これまでの研究知見を踏まえるとうつ病で12～70%、不安症で43～56%と報告されている(宇野, 2018)。ASDの基本症状が社会的コミュニケーションの障害であり、対人関係の形成とその維持に直接関連するため、ASD者の友人関係の形成について着目する必要がある。

友人関係の発達

友人関係の本質は、互いに同等と見なしている二者間での互惠性および深い関与にあるとされている(Hartup, 1983)。また青年期までにヒトは個々の友人関係だけではなく、仲間集団も形成していく。この仲間関係や友人関係が子どもの発達における重要な環境であることは長らく認識されてきたが、概念的・理論的に理解されてきたため、仲間関係の実証研究は1980年代に入ってからになる(Cillessen, & Mayeux, 2004/2013)。例えばBagwell(2004/2013)のレビューでは、より多くの友人を持つことと仲間からの拒否が少ないことは、よりポジティブな自己概念や学業上の適応(Vandell & Hembree, 1994)や孤独感の低さ(Parker & Asher, 1993)と関連している。一方で、前青年期に親密な友人を持たないことは成人期の抑うつ症状や自己コンピテンスの低さと関連し(Bagwell et al, 1998)、仲間関係からの拒否は子どもの覇気のなさや学業成績の低さ、成人期の地域活動への関与の低さと関連していた(Bagwell et al, 2001)。特に持続的な仲間からの拒否は、大きなストレスを生み出すだけでなく、サポート集団をほとんど持たないことから、対処スキルを発達させることができず、自尊心をさらに低くしてしまう。このように仲間からの拒否は、子どもの長期的適応に間接的な影響を与えることがわかってきた(Coie, 1990/1996)。これらの傾向は現代においても変わることなくみられ、ストレスフルな仲間関係とメンタルヘルスの悪化が、弱体化した自己コントロール機能を媒介して展開していくことが注目されている(Troop-Gordona et al, 2021)。ASD者の場合は、何らかの支援がなされないと青

年期に社会的孤立に陥るリスクを持っている。そのため、社会的孤立を防ぐためにも友人関係を焦点に置いた介入が必要となる。

友人関係問題への介入としての社会的スキル

仲間関係は実際には相互関係の中に存在する複雑なものであるが、社会的スキルの低さが仲間からの拒否にあいやすい要因であることが従来の研究から指摘されてきた (Matson & Ollendick, 1988)。社会的スキル訓練の実践も、もともとは定型発達成人の主張性に焦点をあてていたが次第に精神疾患を抱える人 (慢性統合失調症患者およびうつ病患者) の社会的スキルの実践が成功し、その後児童へと対象拡大してきた (Matson & Ollendick, 1988)。ASD 者の社会的スキルトレーニングの実践研究では、総じて ASD 者の多くは共行動 (行動を共にするだけ) の関係性であり、介入プログラム場面以外で関係を友人関係まで発展した者はわずかであったという難しさもあるが、同じメンバー同士で関係を継続させたい希望を持つ者が多かったことが指摘されている (日戸・藤野, 2017)。また長年、青年期の ASD 者支援の現場では上記の問題に加えて、思春期・青年期に特化し、かつエビデンスに基づいた ASD 者の社会的スキルトレーニングプログラムがなかった点が大きな課題であった。近年はアメリカの UCLA にて PEERS (Program for the Education and Enrichment of Relational Skills) プログラムが開発され (Laugeson, & Frankel, 2011/2018)、日本でもその効果のエビデンスが報告されている (Yamada et al, 2020)。時代とともに我々の周囲の環境が変わっていく中で、その環境に応じた社会的スキルの支援の工夫が求められている。

本研究の目的

筆者らは ICT ツールの活用状況が普及する中で、以下の理由でスマートフォンアプリ (以下アプリとする) を援用した社会的スキル支援について注目した。1つ目は、アプリは多くの ASD 者が活用しており、友人関係の形成と維持に活用できる優れたツールであることである。2つ目は、発達障害児・者支援として会話といった言葉のみに頼ったコミュニケー

ションは、特に ASD 者の場合は不得手なコミュニケーションスタイルであり、何らかの補完的なツールが必要であると考えたためである。先行研究を概観したところ、アプリを援用した介入研究やメンタルヘルスを評価するアプリの研究は多く見られるが、余暇支援に着目したアプリはまだ見られない。そこで今回筆者らは余暇活用を支援する「余暇支援アプリ」の追加機能の開発と試験運用を行った。本論文では、(1) 余暇支援アプリの開発、(2) コミュニケーションスキル支援の視点から余暇支援アプリとその臨床的活用について実践報告をする。

方法

募集手続と対象者

コミュニケーションスキル支援の対象者の募集手続きは、NPO 法人アスペ・エルデの会主催の発達支援事業である ASD 者を対象としたスキルトレーニングのための支援体験合宿にて正会員・賛助会員・外部会員を対象に参加募集を行った。筆者ら(明翫・小倉)が担当した支援プログラムには、2018～2019年にかけて延べ15名が参加した。これらの参加者のうち事前評定と事後評定の両方の結果が得られた14名(男性13名、女性1名)を本研究の分析対象者とした。対象者の平均年齢は17.64歳(SD = 3.84)であり、参加者児童全員が児童精神科医または小児科医によって広汎性発達障害、アスペルガー障害、自閉症のいずれかの診断を受けていた。

測定尺度

コミュニケーションスキル支援の介入効果を検証するために、以下の2点の仮説から測定尺度を選定した。コミュニケーションスキルの支援効果として(1)第3者による行動観察によるスキル向上がみられる、(2)コミュニケーションスキルを身につけたことで対人不安感の低下がみられる、2点を仮説として設定した。

他者評定尺度 旭出社会適応スキル尺度(肥田野, 2012)のコミュニケーション因子を用いた。得点が高いほどスキルが高いと判断される。

自己評定尺度 心理的居場所感尺度(則定, 2008)を用いた。被受容感

因子と精神的安定因子を用いた。双方とも数値が高いほどそれぞれの特性が高いと判断される。

実施手続きと倫理的配慮

事前評定は、本プログラム開始前日の夜にて ASD 青年本人および担当学生スタッフに配布して回答を依頼して、その日に回収した。さらに担当学生スタッフには、担当メンバーの社会的スキルや課題となるところについて随時観察をしてメモしておくよう依頼し、合わせてプログラム内で成長した・改善した点も後に記録してほしい旨、依頼を行った。なお、観察ポイントについて合宿開始前の事前ミーティングにおいて筆者ら（明翫・小倉）が支援プログラムの説明とともに行った。事後評価は、本プログラム終了直後にあたる合宿最終日の夜に ASD 青年本人および担当学生スタッフに評価用紙を配布して回答を依頼して、その日に回収した。なお、事前事後の他者評価については同一学生スタッフが同一の ASD メンバーを評価するように設定した。倫理的配慮として、本研究の参加について、参加メンバーが未成年の場合は保護者に対してはプログラムの概要と目的、スケジュールについて説明を行い、研究参加の同意を書面にて得た。また参加青年についても事前に筆者ら（明翫・小倉）より説明を行い、研究参加の同意を書面にて得た。本研究の実施においては、本研究の手続きは中京大学研究倫理委員会の審査と承認を受けた。統計分析には IBM SPSS Statistics (version25) を使用した。

結果

アプリを用いたコミュニケーションスキル支援の介入プログラムとその結果の記述に先立って、余暇支援アプリの開発について述べる。

発達障害を対象とした余暇支援アプリの開発

筆者ら（辻井・曾我部・明翫）は、発達障害のある成人期にある人々を支援するアプリケーションの開発研究を行ってきた。本研究で紹介するアプリは生活スキルを把握するアプリ（辻井, 2019; 曾我部ら, 2019）に追

加する形で開発を行った（現在は、発達障害成人等の地域支援を支えるアプリ）『ライフログクリエイター』（<https://life-log.org/>）を活用することができる（辻井, 2019）。今回開発した余暇支援アプリは、参加者が自由にイベントを企画し、そのイベントを複数の参加者や支援者が共有することができるいくつかの機能を持っており、参加者の余暇を充実することを目的に開発されたものである。また、一般的な SNS とも似た機能をもつ。

まず当事者らがイベントを企画し運営するとはどのような事か、これまでの青年期支援の経験からどのような問題が予想されるかを話し合いながら大学生に意見聴取を行った。まずイベント企画し、当日に集合してから解散するまでの流れを想定し、イベントを募集するのにどのような手順や募集要項があるかを確認し項目としてまとめた。また起こりうる問題としてはパニックになった時、遅刻や道に迷った時の対応、落とし物の時の対応といった例があげられた。この中で、仲間内で、行きたいお店が異なったときどう対処すれば良いか分からないとの声があった。そこで、後日アスペ・エルデの会学生スタッフらに、友達と興味が重なったときの対応方法をロールプレイ方式で示してもらった。食べたい物が重なる時は、ショッピングセンターのフードコートなどそれぞれの好みで食事をとれる場所へ行く、今回や相手に譲って次回は自分の行きたいところへ行くといった折合いの付け方を同年代の大学生から情報収集した。

アプリは筆者（曾我部）を中心として初期プロトタイプを開発した。イベントの項目については、イベント作成の通知機能や、問題ある発言を報告する機能といったより広い展開を見越しての機能を充実させた。実際に使ってもらい、上がってきた問題点をいくつか修正した。また、継続への要望として通知機能の要望が強いため、利用者の負担とならないような配慮などの検討を行っている。開発したプロトタイプを運用し、大きく2つの課題が出てきた。

1つめは表記についての問題としてまず、漢字が難しかったと報告があった。これは各地で実証実験をする中で、アプリに慣れていない当事者

で実施したため問題が表面化した。支援グループのアドバイスもあり、小学4年生以上の漢字にはルビをふることにした。次に、当事者らにわかりにくい用語があった。例えば、「配偶者」や「自助グループ」については意味や、定義を問う質問が上がった。支援者がいたためその場で説明を行い対応したが、用語の使い方についても再検討するよう意見が出され対応した。

2つめは管理の問題である。このアプリはエリアと呼ぶ地域か所属している施設でグループ分けをしている。さらに、このグループ間は個人情報保護やトラブルを未然に防ぐため交流が無い。そのため各エリアでのユーザの管理も個々をよく知る管理者を立てるべきと筆者ら（曾我部・辻井）は考え、この運用にて支援プログラムを実施した。

コミュニケーションスキル支援プログラムの実施について

本プログラムは、短期支援合宿において実施した。支援合宿体験は、専門家・学生スタッフ・ASD青年ともに4泊5日の合宿訓練を行っており、本プログラムメニューは午前中2時間の集団セッションを3日間かけて行われた。プログラムの実施方法や構成については、Table1に基づいてASD青年に学生スタッフが適宜サポートにつき、筆者ら（明翫・小倉）がプログラムのファシリテーターとして参加した。各セッションはワークブックを使用して小集団での授業形式でセッションと合宿地の周辺にてコミュニケーションスキルの実践練習を進行した。

社会的スキルについてのメニューは数多くあるが、ASDを含め発達障害青年・成人を対象にしたメニューは少ない。そこで、発達障害青年・成人を対象にした優れた社会的スキル支援の取り組みとして Laugeson & Frankel (2011/2018) や Winner (2007/2018) がある。今回はコミュニケーションスキルに焦点を当てて、Laugeson & Frankel (2011/2018) の相互性のある会話スキル、Winner (2007/2018) のコミュニケーション上での身体のあり方を参照し、以下のようにコーチングするポイントを決めた。(1) 共通の興味を見つけること、(2) 相手の話題に関心があることを示すため

Table1 コミュニケーション支援プログラムの概要

内容の詳細	
1日目	<ul style="list-style-type: none">・参加メンバー同士および担当スタッフ（支援者・学生スタッフ）の自己紹介等を行った。・質問紙調査の依頼。
2日目	<ul style="list-style-type: none">・プログラム開始時には、当事者同士でアプリのイベント企画を行ううえで必要な社会的スキルやコミュニケーションスキルについて、プログラム・ディレクターが心理教育を行った。・良い会話について（聞く姿勢・対人距離など）。・集団での良い会話（発言者に聞く際の望ましい姿勢と態度）。・各自自分のスマートフォンや貸し出し用のタブレットを用いて、一般的なソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）と類似した機能のあるアプリを使用するので、SNS使用の一般的な注意点についても取り上げた。
3日目	<ul style="list-style-type: none">・合宿所近辺を散策し、スマートフォンやタブレットのカメラ機能を利用して自分が思う絶景写真を撮って、アプリのチャット機能にアップするように課題を与えた。・1時間後に集合して各グループにて発表と共有をしていった。・支援者は各グループを巡回し、上手くやれているといったように肯定的なコメントをおこなった。・夜のミーティングでは各グループの発表とうまくやれていた点などを共有した。
4日目	<ul style="list-style-type: none">・午後からの余暇活動を計画するためにメンバーで話し合いを行い、スイカ割り、サイクリング、カフェ巡りなどのグループに分かれた。それぞれグループごとにアプリ内でイベントを作成し、チャット機能を使いながら詳細を決めていった。・実際の活動中は、それぞれのグループがチャットに写真を載せながら報告し、違う活動をしていながらも楽しさを共有していた。
5日目	<ul style="list-style-type: none">・前日のことを振り返り、共有できた話題や楽しみについて振り返る時間を作り、話題や楽しみを共有できたこととその意味について考える時間を作った。・合宿全体のキャンプファイヤーでメンバーたちが学んだ成果を報告する場面があったが、そこで他のプログラムに参加していたメンバーに“チャットの会話で気を付けること”や“ネットに写真や動画をアップするときに気を付けること”を発表していた。

にその話題に関連することを質問する, (3) 相手の話を聞くということ (相槌やアイコンタクト, 適切な距離など), (4) 相手の話に関連したコメントをする, (5) 話を聞いているということが相手に伝わる姿勢とは, (6) 会話がやり取りになるためには (会話の独り占めをしない), (7) 最初からあまり個人的なことは話さない, (8) 会話の入り方・会話の入りやすい流れ, である。これらのポイントについてプログラム開始時に心理教育を行った。また, 一般的なソーシャルネットワーキングサービス (以下, SNS) と類似した機能のあるアプリを使用するので, SNS 使用の一般的な注意点についても取り上げた。

その後は Table1 にあるようにメンバーで 4～5 名程度の小グループを形成し, 参加者のコミュニケーションを観察する役割として大学生スタッフもグループに加わった。そこで参加者は企画やコミュニケーションを大学生スタッフともに行った。プログラムでは余暇支援アプリをイベントの企画から基本的には参加メンバー同士で何に関心があるかを話してもらい, 活動 (イベント) を決定し, 活動の様子を余暇支援アプリのチャット機能に写真を掲示するように求めた。プログラム責任者である筆者 (明翫・小倉) は各グループに巡回しながら活動に参加し, 話し合いの際にコミュニケーションの様子を観察し, 本人および観察者であるスタッフに助言等を行った。また, イベントや話し合いを実行するために必要なコミュニケーションスキルについては, 適宜助言を行った。

メンバーのグループによる話し合いは, コミュニケーションスキルの実践練習の貴重な場として考えたため, 合宿中の 3 日のプログラム中においては総計 8～10 回程度実施した。合宿の夜間の大学生スタッフの夜間のミーティングでは, 大学生スタッフが担当参加者の 1 日の行動についてコミュニケーション行動を中心に振り返りを行い, プログラム責任者の筆者ら (明翫・小倉) は担当参加者の観察およびサポートについて個別に助言を行った。

測定尺度による介入効果の検討

事前評価と事後評価の双方の評価が可能であった14名についての結果をTable2に示した。まず、心理的居場所間尺度について示す。被受容感と精神的安定については、有意差は認められなかった。コミュニケーションスキルについては、1%水準で有意な向上を示した ($t(13) = -3.48, p < .01$)。プログラム内にて約3分の1にあたる3名以上が改善を示したコミュニケーションスキルの項目を示すとTable3になる。「適切に視線を合わせ、あいづちを打つ」が6名、「自分が質問をしたときに相手の答えをきちんと聞く」が4名、「会話を適切に終わらせる」が3名、「個人的な情報をむやみに教えない」が3名であった。

自由記述による評価では、「会話の締めくくりがはっきりとしてきた」、「周囲を意識するようになった」、「相手の話に聞く耳を持つようになった」、「自分から話題を出したり、質問することができるようになった」などの行動が見られるようになった。

Table2 介入前後の心理的尺度の平均値と標準偏差

	事前評価		事後評価		t 値	効果量 Δ
	平均	SD	平均	SD		
被受容感	22.14	4.38	23.43	5.06	-.99	0.30
精神的安定	30.57	5.71	32.5	7.2	-1.13	0.34
コミュニケーション	12.00	3.92	14.57	3.8	-3.48**	0.66

**...p < .01

Table 3 コミュニケーションスキルの各項目と改善者数

	改善者数
適切に視線を合わせ、あいづちを打つ	6
自分が質問をしたときに相手の答えをきちんと聞く	4
適度に自己主張やアピールが出来る	2
人の話をむやみにさえぎらない	2

しぐさや表情，声の調子などを手がかりに，相手の気持ちや冗談や皮肉などがわかる	2
相手の応答や言葉に対して常識的な受け止め方をする	1
会話を適切に終わらせる	3
相手に合わせて言葉遣いを変える	0
個人的な情報をむやみに教えない	3
相手が興味を持っていそうなことから会話を始める	1

考察

コミュニケーションスキル支援プログラムの効果検証について

コミュニケーションスキルの支援効果として (1) 第3者による行動観察によるコミュニケーションスキルの向上がみられる，(2) コミュニケーションスキルを身につけたことで対人不安感の低下がみられる，2点を仮説として設定した。事前・事後評価の各データにおいて対応のある t 検定を用いて比較したところ，旭出社会適応スキル尺度のコミュニケーション因子のみ 1%水準で有意な得点の上昇がみられた。これらの結果から仮説 (1) 第3者による行動観察によるコミュニケーションスキルの向上がみられるは支持され，仮説 (2) コミュニケーションスキルを身につけることで対人不安感の低下がみられるは支持されなかった。

コミュニケーション因子得点の有意な上昇は，プログラムによるコミュニケーションスキルの練習効果と考えられる。Table3から「適切に視線を合わせ，あいづちを打つ」，「自分が質問をしたときに相手の答えをきちんと聞く」，「会話を適切に終わらせる」，「個人的な情報をむやみに教えない」の項目において3名以上の改善者がみられた。

本プログラムの特質として以下のことが考えられる。初日のコミュニケーションスキルについての心理教育を行い，その後，余暇支援アプリを用いて，当事者メンバーで何度もイベントを企画してコミュニケーションの実践を行った点である。そして，当事者メンバーが企画した活動が成功

するように、イベントを実行するために必要なスキルの実践練習を適宜行った点にも特徴があると考えられる。

一方で、心理的居場所感尺度については有意な上昇が認められなかった。この点については以下の2点が考えられる。1つは本データの特徴として事前評価の段階から被受容感と精神的安定因子の得点が高かった点である。本参加メンバーは本支援合宿に何度も参加しているということと関連しているように思われた。もう1つはコミュニケーションスキルの向上による安心感や対人不安の緩和については、合宿後メンバーが自分の住む地域の中で実践し、うまくやれている感覚を持ってないと安心感の向上にはつながらないと考えられた。

発達障害を対象とした余暇支援アプリの活用

現在我々の生活ではインターネットが普及し、SNSを用いて自分の活動を写真やコメントとともに掲載して、友人とともに共有する社会的行動が浸透している。このSNSの構造を余暇支援に使えるようにしたのが本研究で紹介した余暇支援アプリであるが、このアプリは様々な活用を行うことができる。

本研究で実施したコミュニケーションスキルプログラムでいえば、余暇支援アプリの活用はメンバー同士の話し合いの回数に伴う心的飽和の予防の役割があると考えられる。心的飽和とは、特定の同一行為を反復継続して遂行する場合、疲労や単調感とは異なり、続行の努力や善意があっても、その仕事を打ち切ってしまうような心的状態を指す(川口, 1981)。本研究では、会議室など同じ場所で話し合いとなると取り上げるテーマのバリエーションも限定され、回数とともに同じことの繰り返しとなり、心的飽和状態からコミュニケーションの練習を多くこなすことが難しくなると推測された。しかし、余暇支援アプリを活用すれば、お互いに興味のある場所を仲間ともに出かけ、美味しいものを食べたり、珍しいものや綺麗だと感じた景色を共有し、メンバーでともに楽しむことが容易になる。そしてその活動についての感想を共有する際にも、ASDの青年・成人はその障

害特性（社会的コミュニケーションの問題）から全体の話題から会話がそれてしまったり、一方的な会話になることもある。またグループ会話は双方向に刻々と情報が飛び交うため、支援者としてもリアルタイムでコミュニケーションを教えるのが難しく感じる部分である。その点、SNSや余暇支援アプリにある写真についてコメントすることであれば、共有する対象が絞られており、話題がそれることが少なくなる構造である。適切なチャットのコメントの仕方についてはSNSの心理教育で原則を教えて、あとは余暇支援アプリを実際に使いながら必要であれば支援者がその書き込みについて適切なコメントについて助言することができる。今回のプログラムでのメンバーは自分で感じたことを余暇支援アプリのチャットで写真等に挙げて、他のメンバーから肯定的なコメントをもらうといった現代のコミュニケーションスタイルをより安全な形で学習することにつながったのではないだろうか。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、いくつかの限界と課題が残っている。1点目はフォローアップデータがないことである。多くの介入研究では事前評価、事後評価、フォローアップとする場合が多い。従って今回事後評価で示されたコミュニケーションスキルの改善がどの程度維持できているかを確認することが必要になってくる。2点目は、対照群をもたない実践研究であることである。本研究で示したコミュニケーションスキルプログラムからのみ得られた効果ではなく、4泊5日の合宿訓練全体の要因が事後評価に反映されている可能性も考えなければならぬ。これらの点を踏まえると本研究の見解は限界があることは否定できない。今後は海外の研究に示されるような頑健なデザインにおける効果研究を実現していくことが重要である。

付記

本研究は、JST、RISTEX、JPMJRX17G4の支援を受けて実施したものである。

文献

- ・ Bagwell, C. L., Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. (1998). Preadolescent friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. *Child development*, **69**, 140-153.
- ・ Bagwell, C. L., Schmidt, M. E., Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. (2001). Friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. *New directions for child and adolescent development*, **91**, 25-50.
- ・ Bagwell, C. L. (2013). 友人関係, 仲間ネットワーク, 反社会的行動 (中澤潤監訳). *子どもの仲間関係: 発達から援助へ* (pp.36-54). 京都: 北大路出版. (Bagwell, C. L. (2004). Friendships, peer networks, and antisocial behavior. In J. B. Kupersmidt & K. A. Dodge (Eds.), *Children's peer relations: From development to intervention* (pp.37-57). Washington, D.C. American Psychological Association.)
- ・ Coie, J. D. (1996). 仲間による拒否に関する理論化を目指して (山崎晃・中澤潤監訳). *子どもと仲間の心理学: 友だちを拒否するところ* (pp.348-384). 京都: 北大路出版. (Coie, J. D. (1990). Toward a theory of peer rejection. In Asher, S. R., & Coie, J. D. (Eds.), *Peer rejection in childhood*. Cambridge, Cambridge University Press.)
- ・ Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2013). ソシオメトリック地位と仲間集団行動: これまでに明らかになったことと現在の動向 (中澤潤監訳). *子どもの仲間関係: 発達から援助へ* (pp.2-19). 京都: 北大路出版. (Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2004). Sociometric status and peer group behavior: Previous findings and current directions. In Kupersmidt, J. B., & Dodge, K. A. (Eds.), *Children's peer relations: From development to intervention* (pp.3-20). Washington, D.C. American Psychological Association.)
- ・ Hartup, W. W. (1983). Peer relations. In Mussen, P. H. (Series Ed.) & Hetherington, E. M. (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology. vol. 4. Socialization, personality, and social development. 4th ed.* (pp.103-196). New York: Wiley.
- ・ 肥田野直監修・旭出学園教育研究所 (2012). ASA 旭出式社会適応スキル検査.

東京：日本文化科学社.

- ・日戸由刈・藤野 博. (2017). 自閉症スペクトラム障害児者の仲間・友人関係に関する研究動向と課題. *東京学芸大学紀要総合教育科学系*, **68**, 283-296.
- ・川口 勇 (1981). 心的飽和. 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田 新 監修 *心理学事典* (pp.429-430) 東京：平凡社
- ・Laugeson, E. A., & Frankel, F. (2018). *友だち作りの SST：自閉スペクトラム症と社会性に課題のある思春期のための PEERS トレーナーマニュアル* (山田智子・大井 学・三浦優生監訳). 東京：金剛出版. (Laugeson, E. A., & Frankel, F. (2011). *Social skills for teenagers with developmental and autism spectrum disorders: The PEERS treatment manual*. London:Routledge.)
- ・Matson, J. L., & Ollendick, T. H. (1993). *子どもの社会的スキル訓練：社会性を育てるプログラム* (佐藤容子・佐藤正二・高山 徹訳). 東京：金剛出版. (Matson, J. L., & Ollendick, T. H. (1988). *Enhancing children's social skills: Assessment and training*. Oxford: Pergamon Press.)
- ・則定百合子 (2008) . 青年期における心理的居場所感の発達の变化. *カウンセリング研究*, **4**,164-72.
- ・Parker, J. G., & Asher, S. R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental psychology*, **29**, 611-621.
- ・曾我部哲也・伊藤大幸・明翫光宜・中島卓裕・高柳伸哉・浜田恵・香取みずほ・西岡克真・辻井正次 (2019). 自閉スペクトラム症成人の生活支援のアプリケーション開発の試み. *臨床精神医学*, **48**, 985-995.
- ・Troop-Gordona, W., Schwartzb, D., Mayeuxc, L., & McWooda, L. M. (2021). Peers and Psychopathology. *Reference Module in Biomedical Sciences*. Elsevier (<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/B9780128188729000492>) (2022年5月13日12時24分)
- ・辻井正次 (2019). 戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 令和元 (2019) 年度研究開発実施報告書「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」研究

開発領域「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」

〈https://www.jst.go.jp/ristex/funding/files/JST_1115150_17942526_2019_tsujii_YR.pdf〉 (2022年5月13日16時09分)

- ・宇野洋太. (2018). 疫学 c. 他の精神障害・身体疾患との併存. (内山登紀夫編集, 編集協力宇野洋太・蜂矢百合子) 子ども・大人の発達障害診療ハンドブック-年代別に見る症例と発達障害データ集. (p.221). 東京: 中山書店.
- ・Vandell, D. L., & Hembree, S. E. (1994). Peer social status and friendship: Independent contributors to children's social and academic adjustment. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 461-477.
- ・Yamada, T., Miura, Y., Oi, M., Akatsuka, N., Tanaka, K., Tsukidate, N., Yamamoto, T., Okuno, H., Nakanishi, M., Taniike, M., Mohri, I., & Laugeson, E. A. (2020). Examining the treatment efficacy of PEERS in Japan: Improving social skills among adolescents with autism spectrum disorder. *Journal of autism and developmental disorders*, 50, 976-997.
- ・Winner, M. G. (2018). ソーシャルシンキング：社会性とコミュニケーションに問題を抱える人への対人認知と視点どりの支援 (稲田尚子・黒田美保監訳, 古賀祥子訳). 東京: 金子書房. (Winner, M. G. (2007). *Thinking about you, thinking about me*. San Jose: Think Social Publishing.)